

# 有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第316次調査

第2回現地説明会（資料）



「天保15年伊丹郷町分間絵図」解説図

八木哲浩編集・解説『伊丹古絵図集成』（伊丹市立博物館 1982年）より部分掲載

平成20年8月2日(土)



伊丹市教育委員会



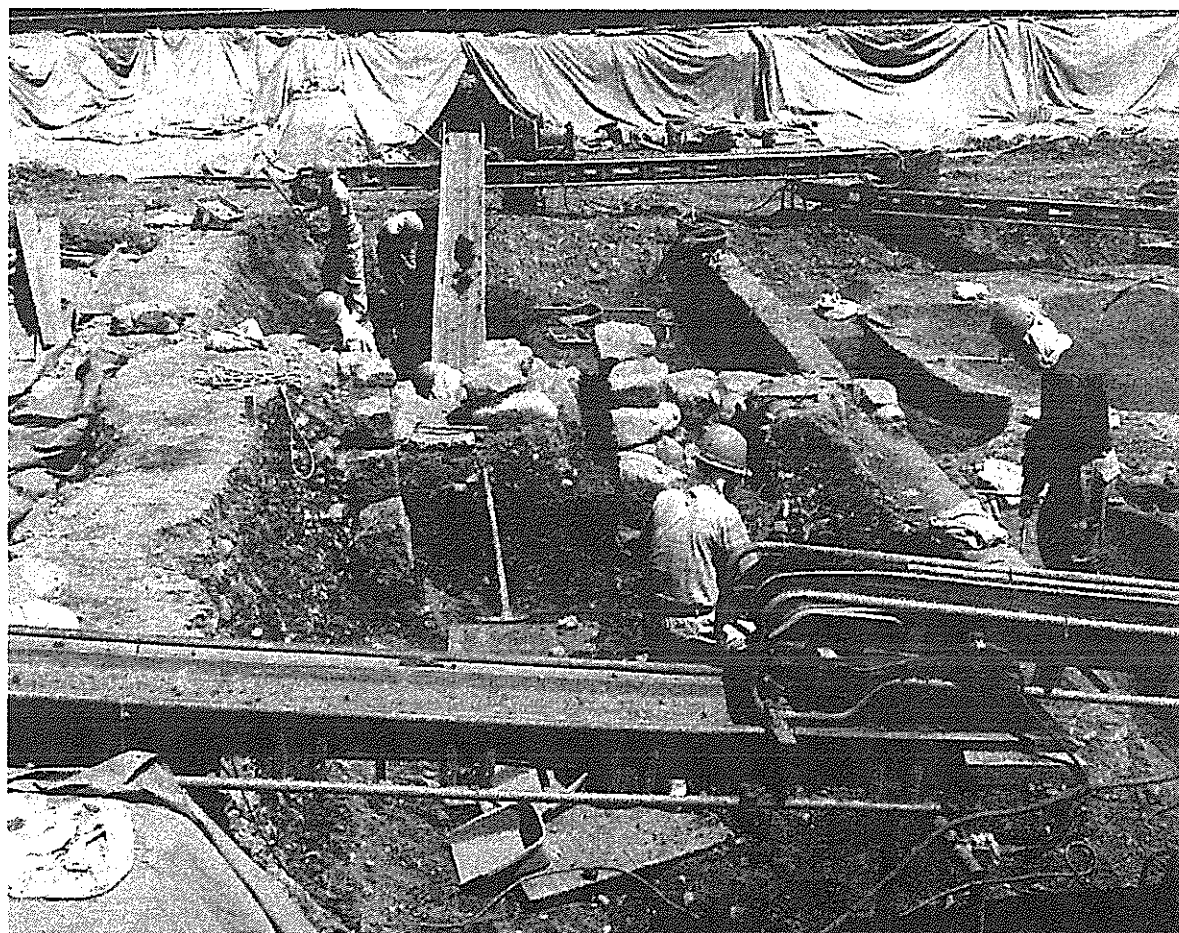
# 有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第316次調査 第2回現地説明会 資料

## I 遺跡の概要

現在、調査中の有岡城跡・伊丹郷町遺跡第316次調査地点において、戦国時代の有岡城の溝跡や、江戸時代の酒蔵跡が発見されました。

調査はまだ継続中ですが、その中間成果を報告いたします。

1. 遺跡名 有岡城跡・伊丹郷町遺跡
2. 調査回数 第316次調査（Ⅱ区）
3. 調査原因 店舗（複合施設）建設に伴う発掘調査
4. 調査地 伊丹市伊丹2丁目地内
5. 調査期間 平成19年12月19日～平成20年8月（現在調査継続中）
6. 調査面積 約2,000㎡（うち現在の調査は東側半分）
7. 調査主体 伊丹市教育委員会



調査風景

本遺跡からは、古くは縄文・弥生・古墳時代の遺構・遺物が検出されますが、主たる時代は鎌倉時代～江戸時代です。この間は、伊丹氏及び荒木村重が居城していた鎌倉時代～安土桃山時代＝「伊丹城・有岡城期」、有岡城廃城後、酒造業で栄えた江戸時代＝「伊丹郷町期」の2時期に分けられます。この2時期の遺構の概要について、以下に説明します。

### \*伊丹城・有岡城期

在地武士の伊丹氏の居城である「伊丹城」は南北朝時代の文和2年（1353）に、はじめて文献に現れます。永禄11年（1568）に織田信長が入京すると、伊丹氏は信長方につき、「摂津三守護」の一人になりますが、荒木村重によって天正2年（1574）に伊丹城は落城します。

荒木村重は伊丹城を「有岡城」と改め、侍町と町屋の全体を堀と土塁で取り囲んだ「惣構え」の城に大改造したと考えられています。

中世の城では、城と家臣団の居住地や町屋地域は離れた所にありました。それが次第に近接するようになり、室町時代末期には城と町を堀や土塁などの防御施設によって囲む「惣構え」の城が造られ始めます。有岡城は「惣構え」の城としては早い段階で成立した城で、歴史的に重要視されています。

有岡城の構造は、「信長公記」の記述や江戸時代の絵図などから、主郭は現在の JR 伊丹駅付近にあり、その西側に侍町、さらに、その西側一帯に町民の住む町が広がっていたことがわかっています。

主郭部の発掘調査では、主郭部の周囲に内堀と土塁が設けられていることがわかり、内堀の規模は幅約15m、深さ約2.5m以上で、石垣はなく、素掘りの堀であることも確認されました。さらに、主郭部西側にあった侍町の発掘調査では堀跡を数ヶ所検出し、幾重にも堀を巡らしていたことがわかりました。また、江戸時代に描かれた「文禄伊丹之図」（第3図）では、伊丹郷町の中央部を南北に流れる「大溝筋」が描かれ、それに平行するように土塁が表現されていることから、侍町と城下町を区画する防御施設が設けられていたと考えられていました。平成11年の県道伊丹停車場線の発掘調査や平成15年の第276次調査（現二トリ）で、「大溝筋」の直下から巨大な堀を検出し、その実態が明らかになりました。

「大溝筋」は、当初は幅約6m、深さ2.7mの堀で、形状は逆台形を呈する箱堀であることもわかりました。さらに、平成18年におこなった第305次・310次調査では、その堀がさらに南側に延びていることがわかりました（第2図）。堀は江戸時代前期には埋め戻され、

その上層に新たに石組みの溝が設けられて、現代まで使用されていました。

また、検出した堀跡は現在の地割に平行するものが多く、伊丹郷町内の地割は有岡城期から改変されていないこともわかりました。

#### \*伊丹郷町期

有岡城は天正7年(1579)に信長に攻められ、落城します。その後、天正11年(1583)に廃城となり、残された城下町は江戸時代以降、酒造業を中心とした在郷町として発展します。

伊丹郷町を構成する15ヵ村のうち伊丹村は、当初は材木町・鍋屋町など15の町で形成されていました。町場は次第に拡張し、江戸時代中期には27町に増えます。

発掘調査では、町屋のようすをうかがえる遺構・遺物が多く検出されます。その中で、伊丹郷町の主産業であった酒造業に関する遺構も多く検出されます。

酒蔵は、江戸時代前期は現在の産業道路周辺に点在しており、4×5間以上の礎石建物、釜場や搾り場などの酒造遺構も単基式のものが検出されます。

江戸時代中期には産業道路の西側・南側にある町屋地域にも広がり、礎石建物も6×6間以上と大型化します。それに伴い、礎石下には数段の根石を設けるようになります。釜場や搾り場も単基式に加えて2基連式のものが出現し、酒造業の発展が遺構からもうかがえます。

江戸時代後期になると、有岡城廃城後に畑地となっていた大溝筋より東側の地域にも酒蔵が建てられ、伊丹郷町内に広く点在するようになります。建物はさらに大型化し、6×10間以上となり、搾り場なども4基一体のものなどが出現して、酒造業がさらなる発展期を迎えたことがうかがえます。

文献資料から、伊丹郷町の酒造業は、元禄年間から享保年間(17世紀後半～18世紀初頭)、文化・文政年間(19世紀前半)に盛期を迎えたことがわかっており、発掘調査成果と一致します。

## II 調査成果

第316次調査地点は、有岡城主郭部の西南約250mに位置し、有岡城期では侍町に属します。また、江戸時代では伊丹村のうち「中之町」・「鍛冶屋町」にあたります(第3・4図)。

本調査区には、小西酒造株式会社の酒蔵である「万歳蔵」が建っていました。19世紀中期に建てられたと考えられています。

発掘調査は調査区を2分割し、西側をI区、東側をII区とよんでいます。現在の調査地点はII区にあたります。調査は継続中ですが、有岡城期と伊丹郷町期の遺構を検出しました。また、先に調査したI区で検出した堀から魚の骨や植物の種が出土したことが新たにわかりましたので、これについてもあわせて説明します。

#### \*伊丹城・有岡城期(第2・3次面) →第6・7図参照

一石五輪塔や石仏を使用した溝や、池状遺構を検出しました。

溝跡(SD02004)は、調査区東側を北壁から南壁まで南北方向に延びます。規模は、長さ約31m以上、幅約1m、深さ約0.5m以上で、断面はU字状を呈します。出土遺物は、備前焼甕、中国製青花皿などで、これらの出土状況から、16世紀後半～末には埋め戻されていることがわかりました。また、溝の一部に、一石五輪塔や石仏を側石として転用していました。このような形状の溝は、西側のI区でも検出しました。また、周辺部でも数例あります。遺構の年代も共通して伊丹城・有岡城があった16世紀代であり、この時期の溝のあり方を考える上で重要な資料です。



池状遺構(SX03009)は、調査区中央より検出しました。平面形は方形を呈し、規模は一辺約4.3m、深さ約0.7mを測ります。遺構の底には細かい砂が堆積していました。出土遺物は、備前焼甕・播鉢、土師質土器羽釜などで、これらの年代から16世紀後半に埋め戻されたと考えられます。

\* 伊丹郷町期（第1次面） →第5図参照

江戸時代～近代の酒蔵（礎石建物）と、その内部にあった酒造遺構「搾り場（槽場）」を  
発見しました。また、石積み溝「大溝筋」を発見しました。

当調査地には、弘化4年(1847)の祈禱札がある「万歳蔵」が建っていました。

第1次面では、調査区全域で礎石を数基検出しました。礎石は、その下に数段の根石を積んでおり、大型建物に対応するためと考えられます。さらに、搾り場（=槽場）遺構を8基検出しました。このことから、この大型の礎石建物が酒蔵であったことがわかりました。

搾り場（槽場）遺構

8基検出されました。形態から次の3つに分けられ、①→②→③の順に新しくなります。②以降は近代の搾り場です。

- ①素掘り「1槽さし単基型」 ……搾りは男柱にて。酒槽固定部分なし  
3基（搾り場02・搾り場07・搾り場08）
- ②石積み ……搾りは油圧・ジャッキにて。  
1基（搾り場01×2）
- ③コンクリート敷き ……搾りは油圧・ジャッキにて。  
4基（搾り場03～05、搾り場06） →03～05は3基1セットで使用

素掘りの搾り場の埋土より、17世紀末～18世紀初頭の遺物が出土しました。そのため、その頃には、本調査地点に酒蔵が建っていたことがわかりました。

石積み溝（大溝/SD01001）

調査区中程から石積み溝を検出しました。第276次で検出した「大溝筋」の南続きと考えられます。この溝は南北に延び、長さ約3.1m、最大幅約4.5m、深さ約1.8mにおよびます。当初は素掘り溝で、18世紀代に石積みに造り替えられます。石積み溝は第276次では溝の下層に堀が重なっていましたが、本地点では石積み溝の直下に堀跡はみられませんでした。

このことから、第276次調査で検出した堀跡は、本地点西側調査区（I区）より検出した堀1（SF01）に続くと考えられ、17世紀中頃に堀を埋め戻した後、堀の東側に新たに溝を設けたことがわかりました。

また、石積み溝の埋土を採取し、花粉分析をおこないました。その結果、17世紀後半～19世紀代の層にイネとみられるイネ属型の花粉が大量に堆積していたことがわかりました。イネの花粉は籾や玄米を水洗いした排水によってもたらされます。この石積み溝の両側より17世紀末以降に酒蔵関係の遺構が検出されていることから、検出したイネは酒蔵から流れ出たものと考えられます。

付. I区堀1(SF01)出土の動物・植物遺体について

本調査地点の西側調査区にあたるI区では有岡城に関する堀跡を検出しました。この堀跡は検出状況から16世紀末～17世紀前半に埋め戻されたことがわかっています。

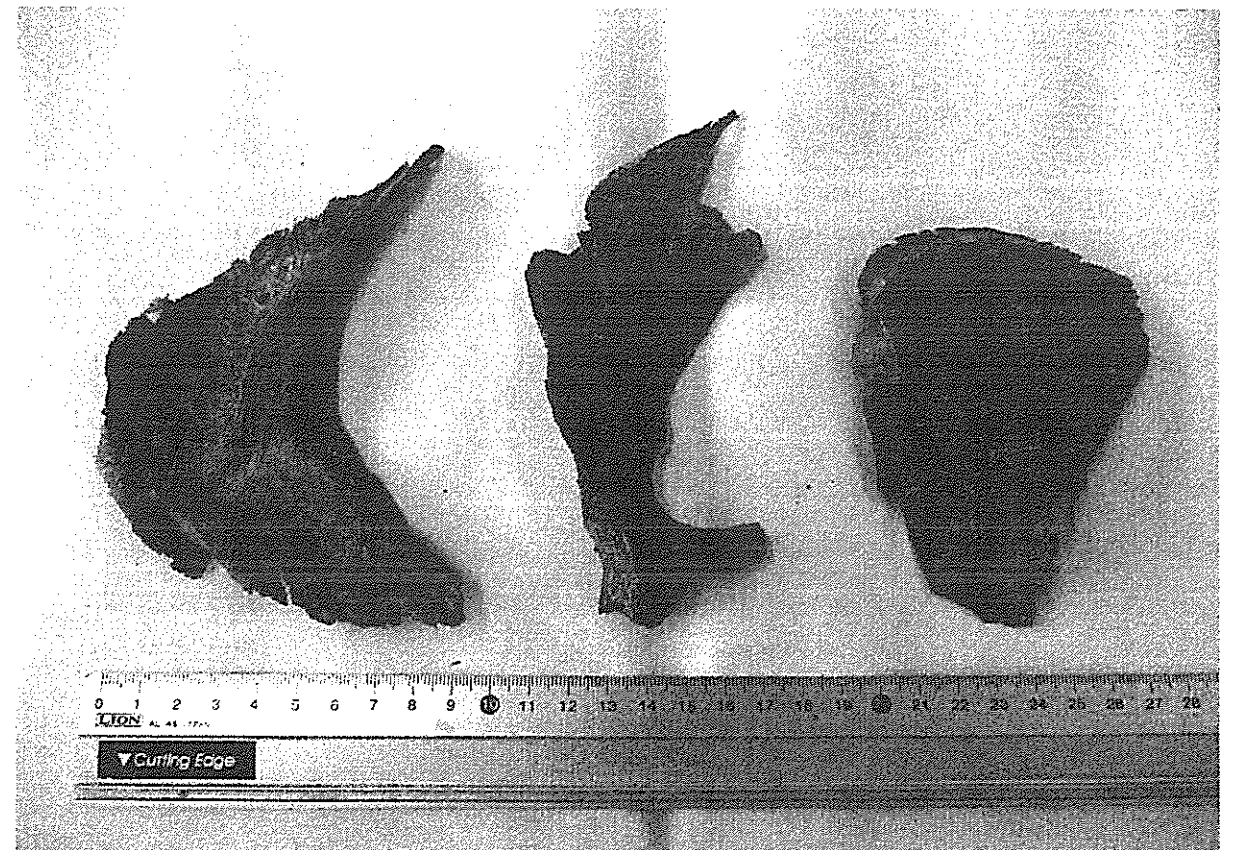
この堀跡からはたくさんの遺物が出土し、そのなかに動物・植物遺体が含まれていることがわかりました。

動物遺体

前回の報告ではスッポンやイノシシ・シカの骨が出土したことがわかっていましたが、土壌を洗浄したところ、鯛・鯉・鮪などの魚の骨が含まれていることがわかりました。

そのなかで、鮪は安土桃山時代から江戸時代初期の遺跡では出土例は少なく、特に16世紀末～17世紀前半と考えられる遺構からの出土例は畿内では他に大坂城跡があるのみです。

鮪は外洋に生息し、鮮度を保つのが難しい魚で、江戸後期になって醤油づけした「づけ」が食べられるようになりました。今回、安土桃山時代から江戸時代初期において、内陸部に位置する伊丹で外洋魚を食べていたことがわかり、当時の食文化を考える上で貴重な成果となりました。



堀1出土の鮪のエラ



### 植物遺体

堀の埋土から採取された植物遺体について、種の同定・花粉分析・珪藻分析を行いました。

種はウメ・スモモ・アンズ・ウリ・ヒョウタン・ナス・ナツメ・ソバ・センダン・カヤなど43種類に及びます。このうち多く出土したのはモモ・センダンで、出土量から周辺に生えていたと考えられます。薬用になる種実が多いのも特徴で、モモは果樹ですが、薬用としても食し、センダンの実は整腸・鎮痛薬などに使用されます。

また、花粉分析では、アブラナ科・イネ・アサ・アブラナ科・ネギ属・ソバ属・ナス科など59種類がありました。アブラナ科・イネなどの草本花粉が多く、これらが堀周辺の水田や畑で栽培されていたことがわかりました。

さらに、堀周辺にはマツ属・コナラ属・アカメガシワ・エノキ属（ムクノ）などの樹木が生え、堀の中にはハスが生育していたことも判明しました。また、珪藻分析でも一定量水量を必要とする淡水生種が多いため、これらから、堀には一定量の水が溜水していたと考えられます。

### \*おわりに

今回の調査地点（Ⅱ区）では、万歳蔵より前の17世紀末から酒蔵があったことがわかりました。酒蔵については、残念なことに古文書などでは該当する酒造家はわかりません。今後の研究課題です。

また、今回検出した「大溝筋」と考える江戸時代の石組み溝跡は、その直下に有岡城期の堀は検出されず、北側の第276次調査（現二トリ）や、南側の停車場線での調査で検出されたような“石組み溝と堀が重なり合う状況”ではないことが判明しました。場所により土地利用の変遷が異なることがわかり、有岡城期・伊丹郷町期の都市構造を知る上での好資料になるとおもわれます。

最後に、植物遺体の分析は、これまで数百次に及ぶ調査で初めての試みでした。動物・植物遺体の分析結果については、戦国時代から江戸時代初期に、本地点周辺で水田・畑で多種類の植物を栽培し、食していることがわかりました。さらに、堀の周辺には松やセンダンなどの樹木が生え、堀の中にはハスが咲いているなど、この時期の伊丹の自然景観と食文化を知りうるものです。

### <<メモ>>

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

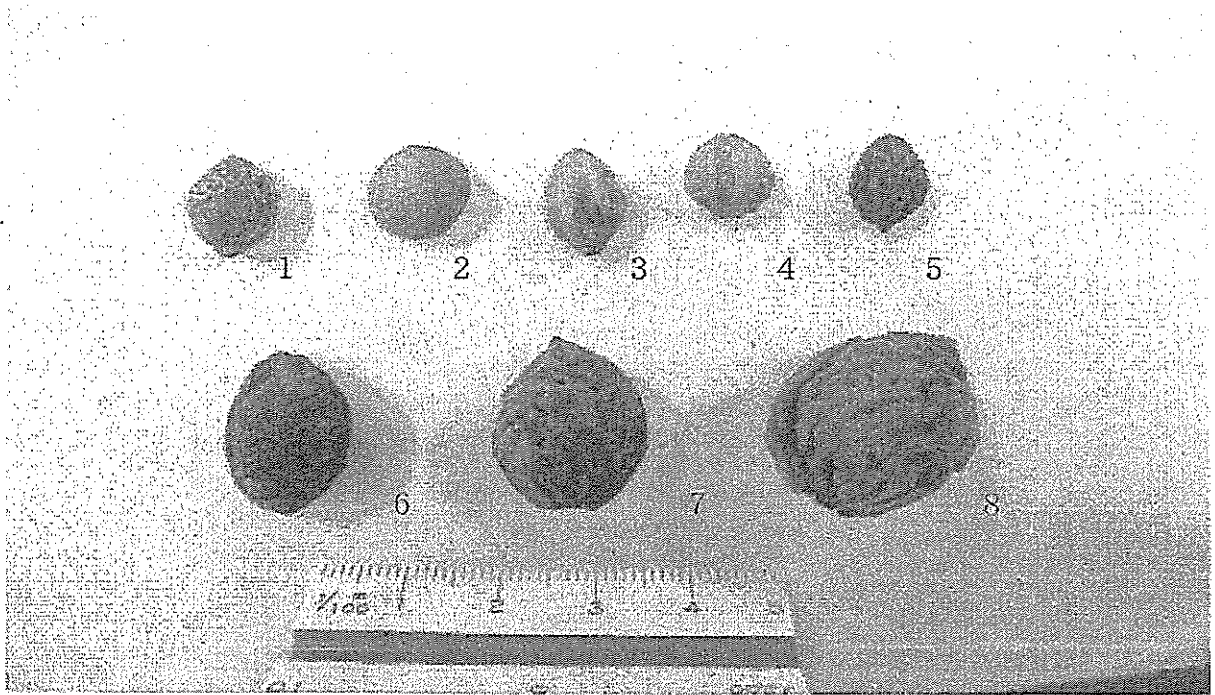
.....

.....

.....

.....

.....



堀1出土の植物遺体

1.スモモ 2.ウメ 3・4.センダン 5.ナツメ 6・8.ウメ 7.モモ

本日は、ありがとうございました。

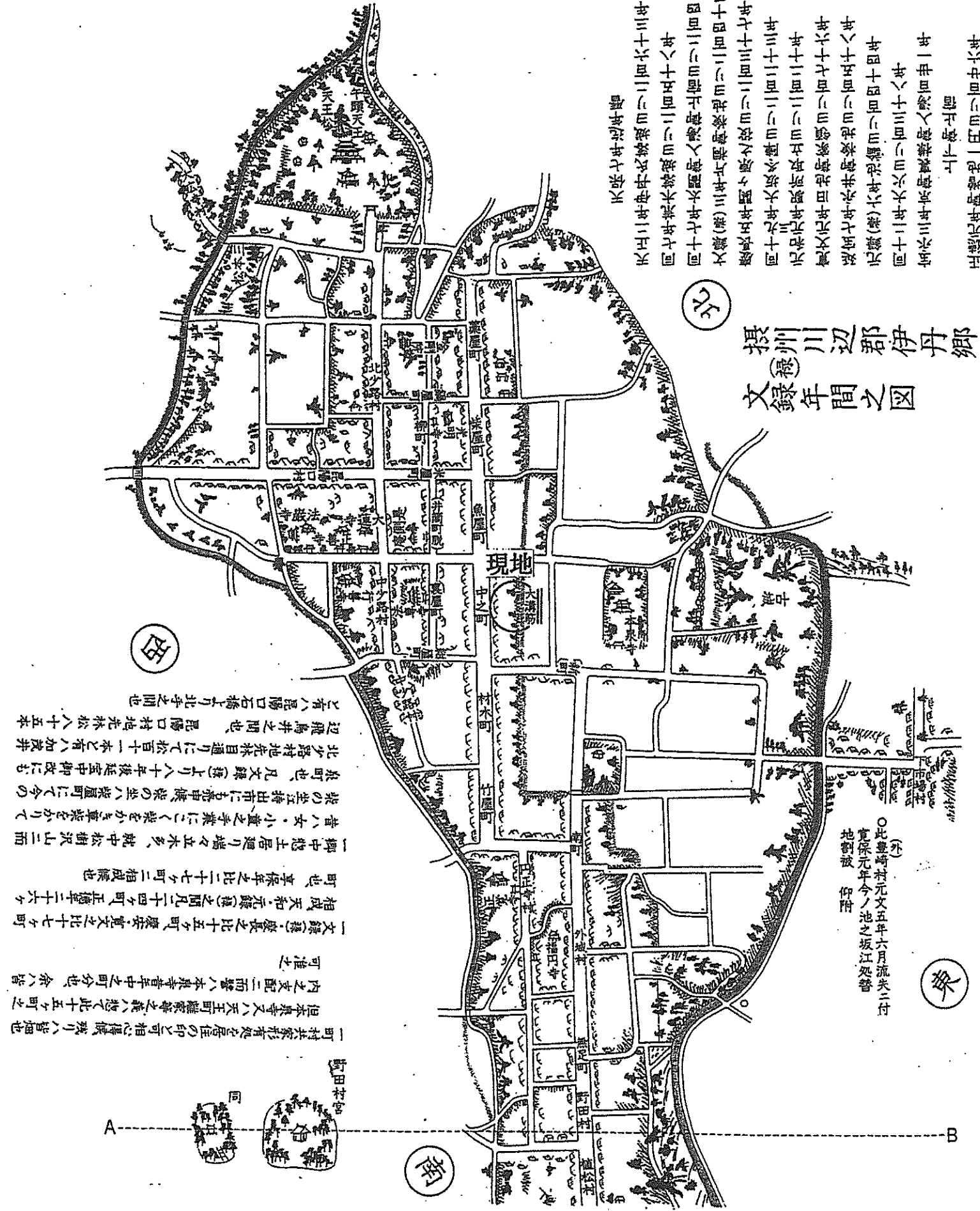


第1図 位置図「有岡城跡・伊丹郷町遺跡」

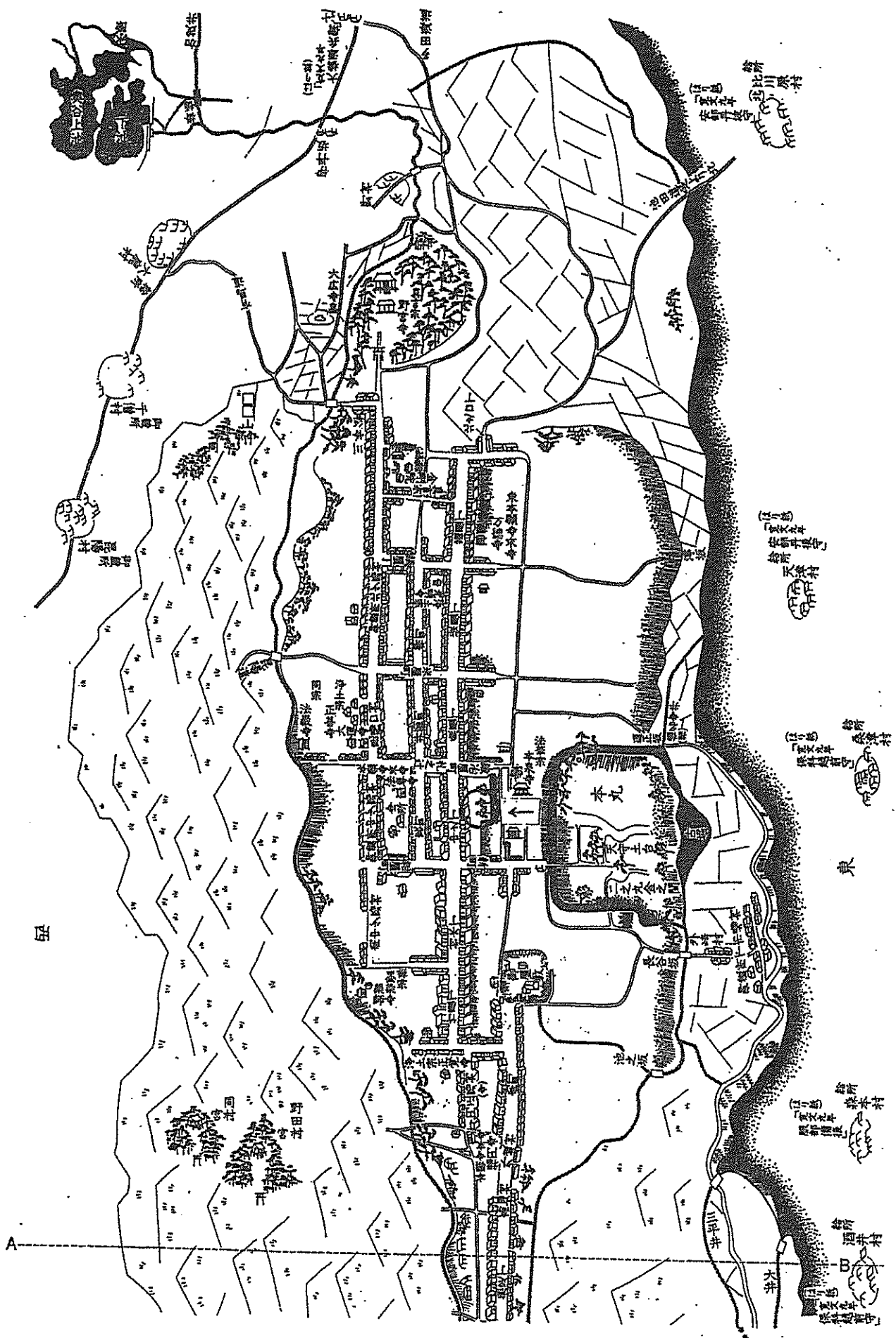


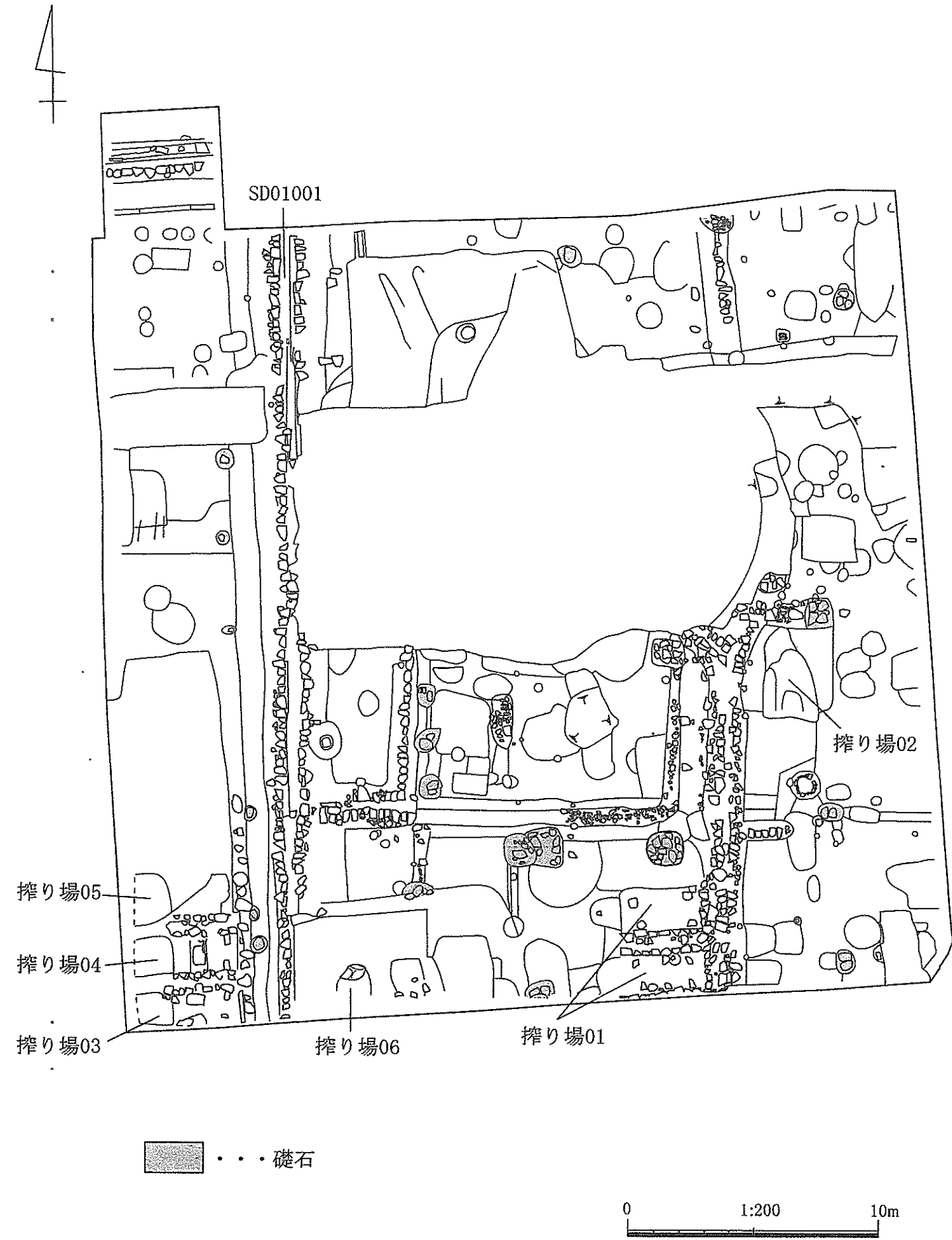
第2図 位置図「有岡城惣構え」  
「伊丹市全図(平成15年)」

第3図 『文禄伊丹之図』（「伊丹古絵図集成」より抜粋）

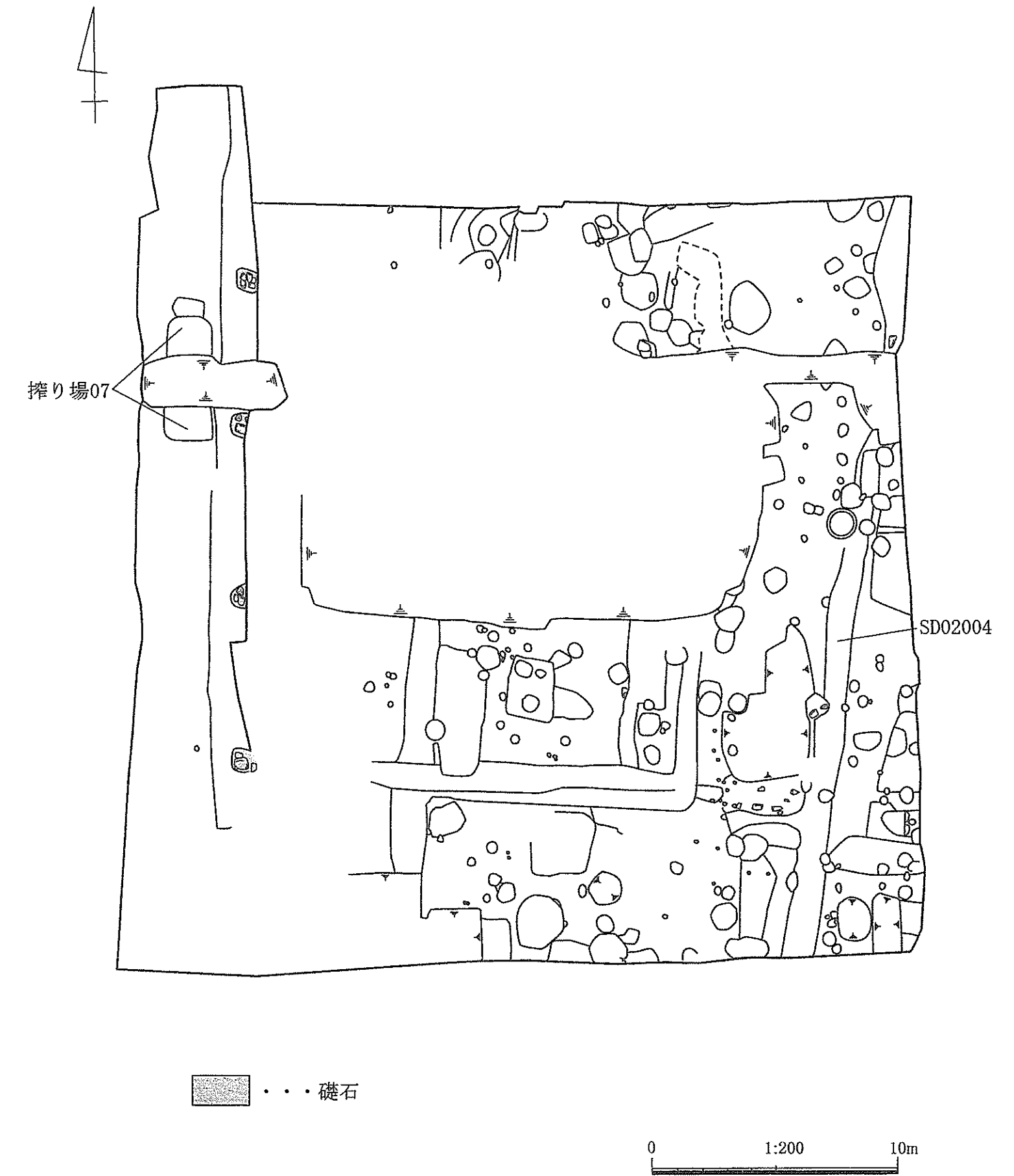


第4図 『寛文九年伊丹郷町絵図』（「伊丹古絵図集成」より抜粋）





第5図 第1次面 平面図

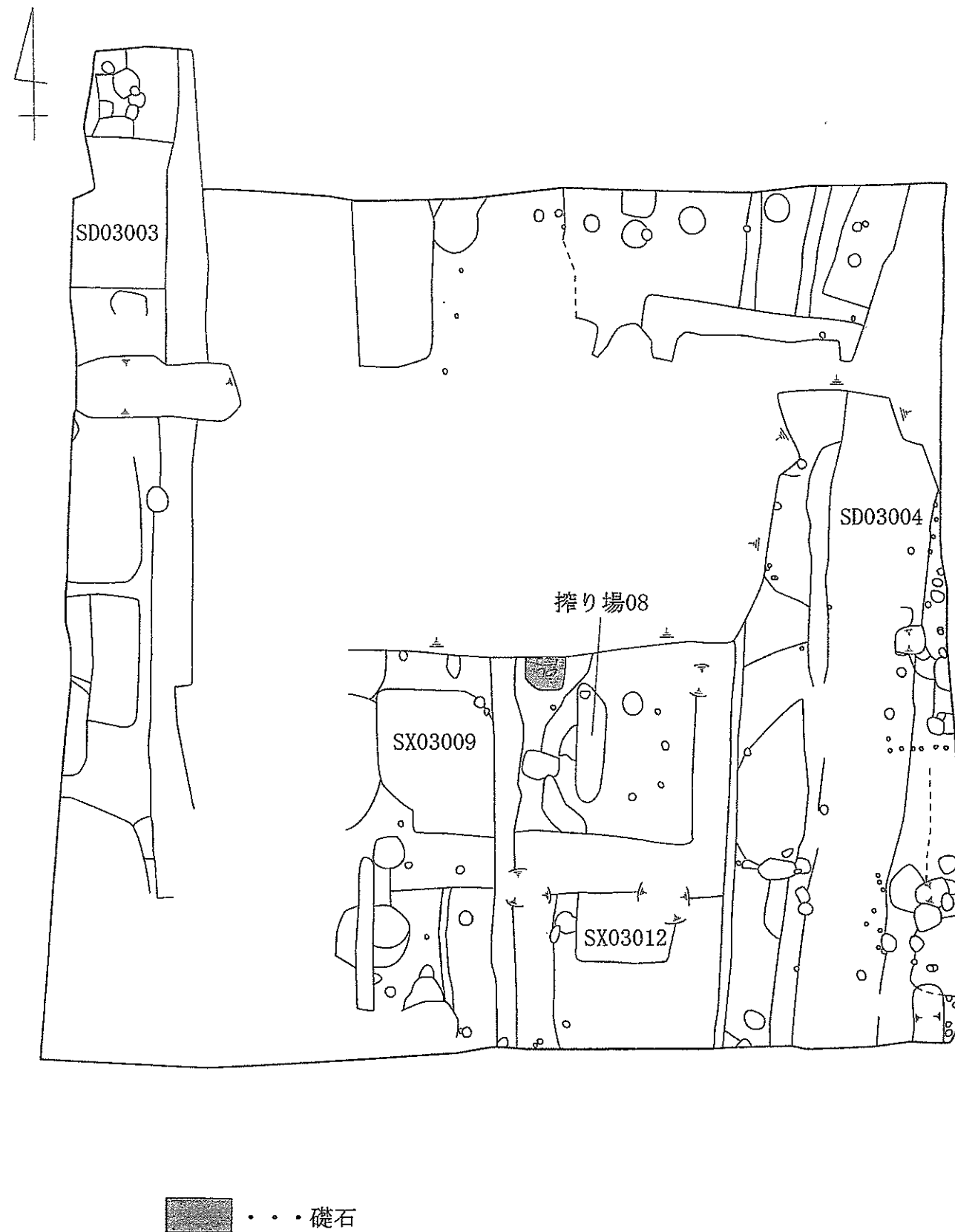


第6図 第2次面 平面図





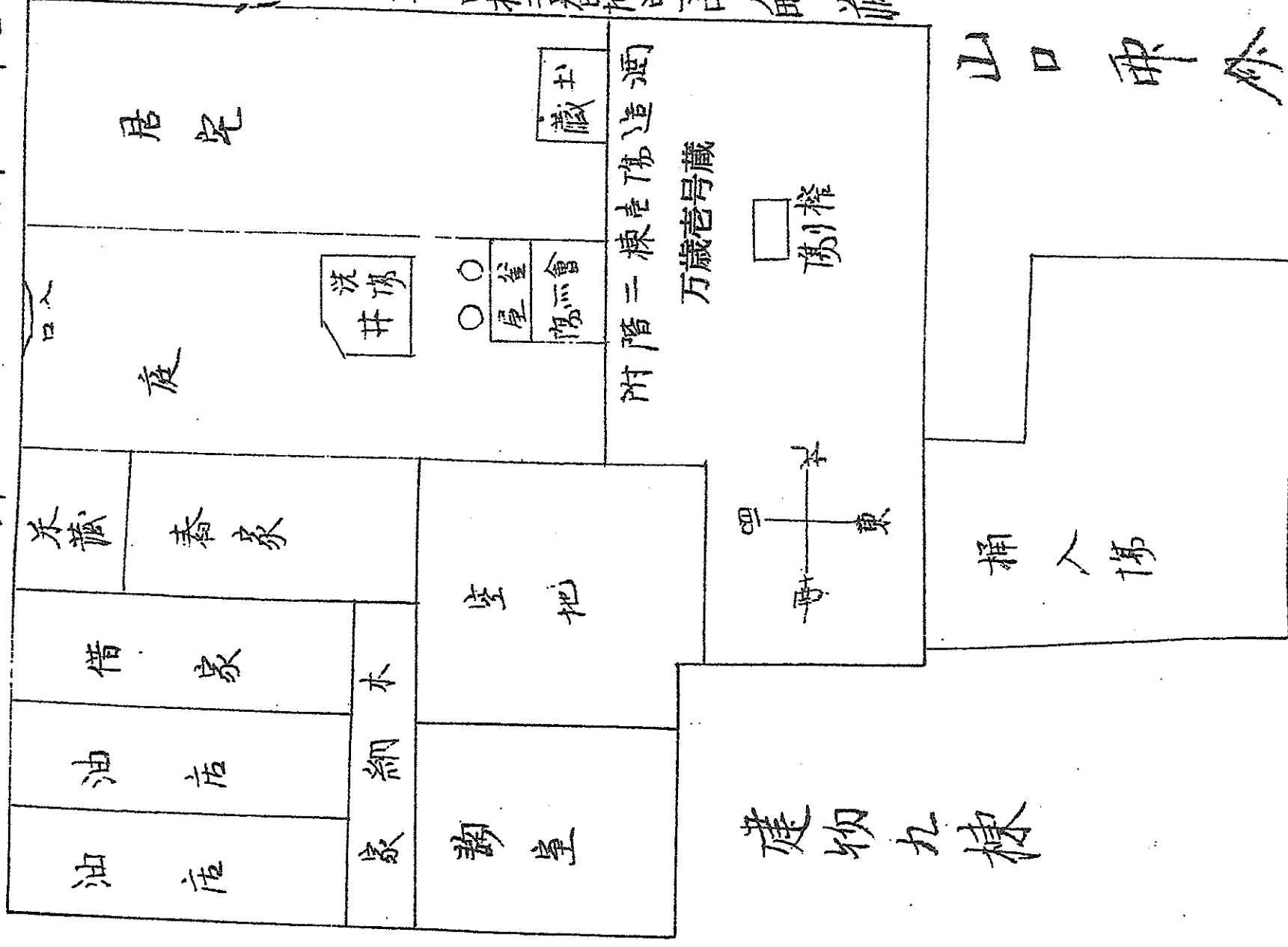
第8図 第4次面 平面図 (S=1/200)



第7図 第3次面 平面図

免許鑑九才一〇七七號

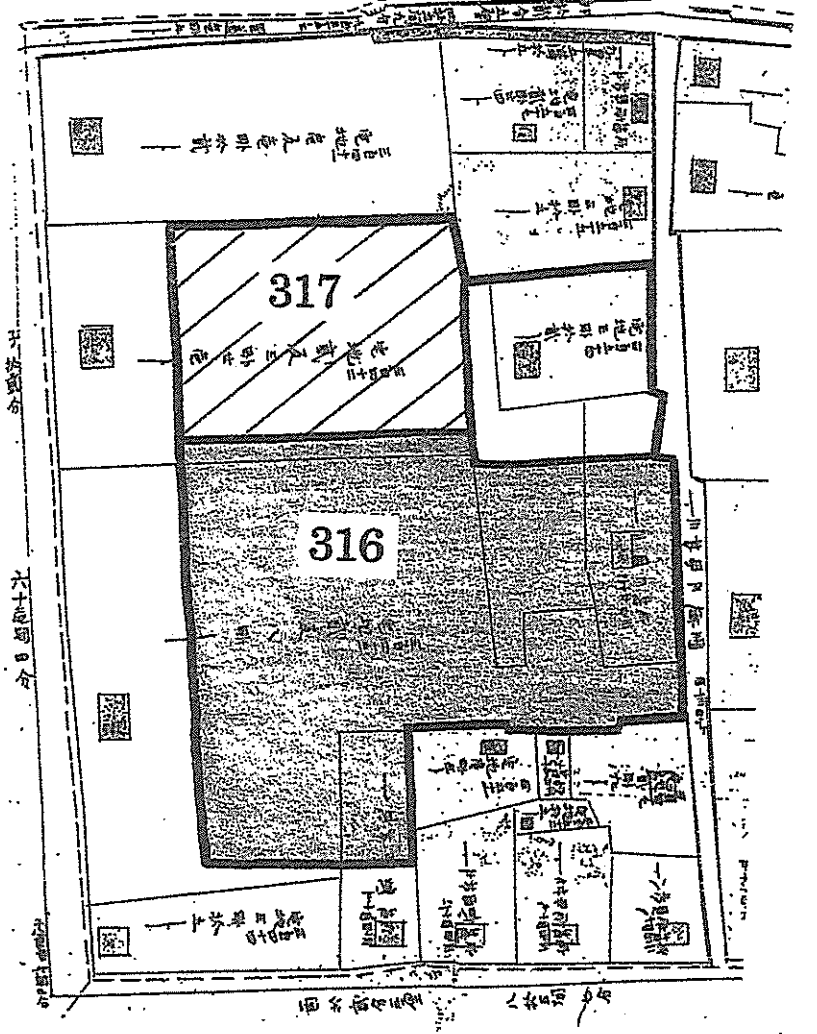
前所字地番二於四百三



今甲口山

棟九物建

第9图『明治19年酒造場絵図面届書写』(1886)



第10图『大正4年地籍図謄本』(部分抜粋・加筆)